

ワークライフバランス： not applicable

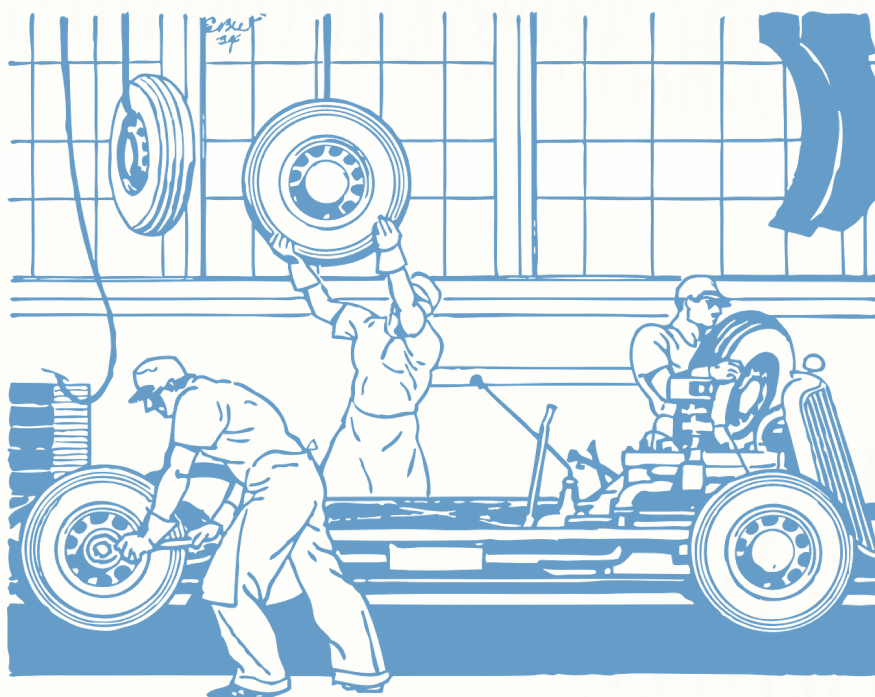
藤原 浩

新潟大学医歯学総合病院地域医療教育センター特任教授/魚沼基幹病院副病院長

ワークライフバランス：日本政府が旗を振って、わけのわからない言葉(カタカナでも漢字でも)をいい出すだけで、距離を置きたくなります。「人流」[本来の意味は、「人間の流れ」ではありません]と同様に、聞いていて気持ち悪くなる言葉の上位に入ります。「ワーク/ライフ バランス」「ワーク-ライフ-バランス」じゃないんですか？

work/life balance: もともと1930年代、第二次世界大戦前夜に、アメリカの会社での、「いかに工場での生産効率を上げるか」という分析から始まった概念といわれています。その結果、1日24時間を、8時間勤務×3ではなく、6時間勤務×4が、もっとも生産性が上がるという結果になったそうです。あくまで使用者目線の、生産性向上のための最適値です。これを病院に適用すると、「最適値なし」。病院は工場ではないので、生産物を生み出しませんから。

1980～1990年代になり、work/life balanceは第一次、第三次産業にも適用拡大されました。すると、農家が自宅で作物出荷の準備、個人商店で店を管理しながら家事など、工場従業員とは同じ扱いができない仕事が多くあることが問題とされました。さらに、目線を使用者から被使用者に動かすと、通勤時間はどうするのか(工場側からみると、生産に寄与する時間ではないので、6時間×4にはカウントされず)、自宅で書類を作成する時間はどうなるのか、という1人1人で事情の異なるものをmassとして扱うことができるのかという疑問が生まれました。多くの矛盾(というか、もともと適用が不可能)がありますが、無理に私にあてはめると、私の通勤時間、病院勤務時間、大学での、指導、研究、教科書・文献チェック、雑誌編集、自宅での書類仕事などの合計、1日15～16時間くらいでしょうか。



work/life=15.5/8.5となります。

さらに、work/life balanceを家事に拡大適用できるかどうか問題です。金銭的利益を生み出さないで、いままでの話の流れからいうと家事はlifeです。私在家で料理をする時間もlifeです(当然)。でも、炊事、掃除、洗濯はworkだといいたい人、たくさんいますよね。気持ちはわかりますが、「work」と呼びたくなるのは、「あまりやりたくない作業」だからなのでしょう。「やりたい作業」は、趣味(lifeに含まれる)ですから。気持ちの問題になると、workかlifeかグレーゾーンが大きいかもしれません。好きでやっていることを、すべてlifeにカウントしてよいという話も聞いたことがありません。結局、work/life balanceは、自分が日常に満足しているかどうかの問題なのでしょう。